

西遊よれよれ日記 フランクフルト篇

7月4日（金）

フランクフルト空港、15時15分頃着。ビジネスクラスの客は早く降りられてラッキーとおもったが、降りても順路の指示が不明瞭で、入国審査はどこかうろろするのみ。団体の後になってしまう。さて荷物も手にしたが、マルクをどうしようかとおもう。シティバンクのキャッシュボックスがあるはずと思い込んでいたが、それが無いのである。両替のところで聞いてもけんもほろろに知らないといわれる。商売敵に聞いても教えてくれるわけがない。ターミナル2にはどうもなさそうである。金が無ければ地下鉄にも乗れず、タクシーもだめで動きがとれない。そのときやっと日本円をもっていたのを思い出して両替すればよいことに気がつく。あほである。近郊線（Sバーン）がフランクフルト中央駅HBFまで走っているはずだがそれが見当たらない。一難去ってまた一難。これも、ターミナル1までスカイラインで行けばそこにあるらしい、と気がつくまで無駄に時間を費やす。地下駅を見つけたときはほっとしたが、またもやクイズが待っていた。切符の買い方がわからない。自動販売機のドイツ語がわからない。販売機を見渡すところに係員が一人いるので聞くが英語があまり通じない（そうかドイツでは英語が通じないのかとそこではじめて気がつく）、自動販売機で買えといっている（わかってるよ、だからどうしたら買えるのかきいとるんだ馬鹿たれ）。”How much?” ”5.80.”よく見ると販売機にF.HBF, 5.80のボタンがある。あ、これだと10マルク入れようとするが受け付けない（馬鹿な機械だ）。しばらく格闘してやっとボタンが先で金は後ということに気がつく。何でこんなクイズを解かされねばならんのか情けなくなる。

予約していたエクセルシオールホテルはHBF（ハオプトバーンホフ、中央駅、線路突き当たりの明かり窓に巨大なパナソニックの看板）のすぐ隣で便利だが、安いだけあって日本のビジネスホテルそっくりである。フロントはあいそがよい。機内食でおなかは減っていないのだが一応メシと外出するが周りの様子がおかしい。ドイツ人らしいのが一人も見当たらず外人ばかりで異様なのだ。一回りしてそうそうにホテルに帰る。

7月5日（土）

朝食はまあまあ、ヴァイキング形式でパン、スクランブルドエッグ、ハムなどどれもおいしい。サラダと間違えてヨーグルトを食べる羽目になる。ベッドメイクの女性達に追い立てられて外出。HBFの周りはやっぱおかしい。用も無いのに電話ボックスに入っているもの（薬をやっているのか）ケンカをしているもの。外人（トルコ、アラブ、ヴェトナム？、台湾）ばかりがぶらぶらしている。王様通りケーニヒス・シュトラッセをゲーテ像の辺りまで来るとそこはドイツであった。道理でホテルが安いわけだ。町を中心ハオプトヴァッヒエの辺りにシティバンクがあるはずで、これはすぐに見つかる。日本語でキャッシュディスプレイを扱うことができる。500マルク（3万4千くらいか）をひきだす。これで安心。

かなり大きい本屋があるので入る。内部は地下をあわせて4階ほどが吹きぬけになったおもしろいもの、数学の本もあるので時間をつぶす。町中の写真をいろいろとって、本屋の前のベンチで休憩。ここでドイツの自転車の固定具がとてつもなく頑丈なのを発見しておかしくなる。日本ではチェーンにビニールを巻いたのが普通だとおもうが、ここでは必要にして十分の域を越えたようなものが多いのである。

帰り、ゲーテ像のところで巨大なドイツ人の長髪に1マルクくれとにじり寄られて恐怖を覚えるが、わからない振りをとおす。駅の構内まで戻り、人のまねをして肉入りのサラダ（巨大）、

ソーセージ、ビールをとる。6日朝のケルン行きの切符を買う。ブラウクンイングリッシュでうまくできた、よしよし。早く寝る。

7月6日(日)

2泊3日のケルン行きのあいだ、荷物をフランクフルトにおいたままで身軽にしたいので、前の夜支配人(らしいの)に Can I put my luggage in storage for 3 days? とやった。もちろんノープロブレムですと愛想のいい返事をもらっていた。今朝のフロントは2人組のインド人(?)で愛想もよくない。ここで早速10マルクやられてしまった。電話代が18マルクだというので50マルクを渡すと、突然ドイツ語で数えながらお釣りを渡すので変だなとおもったが、急いでいたのでありがたいと受け取ってしまったのがアウト。駅で一段落して数えてみると22マルクしか無いのである。そうか、こんな風にやられるのだなど、怒りよりも変な感心のほうが先にわいてくるのが不思議である。預けた荷物のことが心配になってくる。

都市間列車 IC は快適だが、席を指定してない人たちが空き席を探してうろちょろするのが日本人の目からはみっともなくみえる。つまり自由席の車両が存在せず、各席の席番号の横にその席の指定済み区間のリストが挟み込まれていて、自分の乗車区間と重なりあわない席には自由に座ってよい、というシステムなのである。合理的なやり方だと思うが、満席のときに必死にリストをにらんでうろつき回るじいさんや若いのを平然と見なければならんことを想像すると日本人には耐えられんなど思ったりする。もっとも日本では見たくないものを自由席車両というシステムに疎外しておるのだが、一々リストを作って挟む労働力は、まあ失業者があふれているからいいようなものの手間がかかるだろうとも思う。

コーヒーを車内販売で買うが英語が通じない。日本で車内販売のオネーチャンに英語が通じない(失礼)のと同じことで当然である。いくらかと聞くと、ボーイ氏は悠然と4と40の数詞を前の席の学生らしいオネーチャンに聞いて売買成立の運びとなる。大きな紙コップに1/4Lの線までたっぷりと入れてくれるし、生クリーム2個砂糖2個がばらばらとばらまかれる(写真にとる)。

マインツ、コブレンツ、ボンときてケルンに到着、駅のまん前に例の大聖堂がそびえている。空港でのシティバンクのキャッシュディスペンサーと同じく、ケルンのインフォメーション”i”もなかなか見つからずあせってしまう。宿を見つけるという大仕事(では全然ないのだが何しろ初めてなもので)が控えているので何だかあわててしまうのである。”i”ではいくらぐらいの予算かと聞かれるので、高々150と答ると、これがいいかこれは75、これは80と5つくらいを示してどれがいいかと受付嬢は聞く。どれがいいもなにもこちらには何の情報も無いのだから答ようがない。顔を横に振って答ようがないよという顔をして(どんな顔か)ドレヲアナタハスメルノカと言うと通じたらしく笑っておる。OK! This one. と85マルクの宿に決める。mit Bath. 朝食付きである。大聖堂の近くの小さな宿(”王様の宿”亭だったか)はおっさんがフロントに一人、ぶっきらぼうだが不親切ではなさそうで安心、部屋もきれいで感じがいい。フランクフルトの宿よりずっと良くて、安い。

2泊して高速船ジェットフォイルでマインツまで戻ろうと、予約をしにライン川の船着き場をめざすが道を間違ふ。切符売りのおばあさんはジェットフォイルは壊れていますというのである。未練がましく Still on 8 July? ときくが2週間はだめだと言う。こんな場合日本ならどっかその辺にでもお知らせとお詫びがはってあるのだが、此処ドイツでは間違ってもそんなことはしないようである。ライン上りは中止、予定が完全にくずれた。

宿の方に歩いていくと巨大な人だかりである。警察も大勢でている。はて、ネオナチのデモでもあるのかと見ているとパレードが近づいてくる。先頭の騎馬警官が珍しいので写真にとる。

どうもこれはゲイのパレードのようである。5、6人から2、30人の団体が次から次へと山車を繰り出したり、歩きながらプラカードを掲げている。反エイズのパレードみたいだ。隣のブルジョワふうの夫婦のおばはんが何か言うておるが、ヤーパンだけがわかったのでヤー、ヤーパンと答えると面白そうに旦那に何か言うておる。ちょっと、このパレードの関係者じゃないんだけど、は言葉にならない。山車の水鉄砲でびしょ濡れのおっさんが街灯によじ登ってるのを写真にとって、いけねー OK サインを出してしまった（変な意味になるのかな）。途中でフィルム切れとなるが、その辺りからド派手になってくる。ゲイのクラブが組織しているのがかっこも派手、芸も立派、鳴り物も踊りもそろっている。アムネスティやSPD社民党のもあるがそれぞれ10人くらいでしょぼい。山車から撒かれたコンドーム3個が前に落ちてくるが、子供連れのおばはんみんなもっていかれる、しまった記念に拾っておくのだった。京都の永田君そっくりのおかまを発見、フィルム切れが惜しい。

宿の隣のステーキ屋で夕飯。リング豆のズッペ（ブロート付き）、小ステーキ（これにもブロートが付いてくる）にビール小瓶を二本。ビール小瓶は一本3マルク40で車内販売のコーヒーよりもおなじ1/4Lで安い。

宿でフィルムを入れて大聖堂の写真をとりに出る。巨大でフレームに困る。聖堂前では平和団体（ユダヤ青年団、…）の展示がでている。中国語、日本語もあるが中身は空疎。主催者らしいおばはんが話しかけてくるが『ドイツ語はわかりません』。何かハガキを書いて抗議してくれと言うておるらしい。展示の前では4、5人が延々と議論をしている。これは良い。

7月7日（月）

食堂を探していて従業員にモルゲンと言われて慌ててモーニングと言う。そうだと挨拶が基本なのだ、女性従業員にはこちらからモーニングと言う。エクセルシオホテルよりもハム、チーズ、ソーセージが多く味も良い（宿代も安い）。やっぱりフランクフルトよりケルン、帰りたくないが宿を予約している。

駅で切符（8日）をとるが、窓口のおっさんは英語が通じない、分からなければ聞き返せばいいのにいいかげんな切符をくれる。F.HBFの所はちゃんとハオプトゥ・バーンホフと大きな声でドイツ語で言うておるのにフランクフルト空港 F. flughafen 行きになっているし指定席が自由席になっている。コーヒーをのんで切符を取り直す。きゃしゃな窓口嬢（ケルンで特に目立つのは頭も体もとても小さい女性、日本人よりも小さい）に Could you change my ticket? This is not the one I wanted. と言うと、抗議されるのかと身構える。行き先がちがうのは了解、I want a reserved seat. は分からない。10マルクを見せながら Please give me a seat numbere. ああ分かる分かる。で一件落着。

大聖堂に登る。螺旋階段がいつまでも続き、昇り始めたことを後悔するが、頂上から写真をとっているうちにその爽快さに登ってよかったと思ひ直すのである。単純である。

とにかく船に乗らなくてはかっこがつかないからとライン川に行くことにする。が、まずは腹ごしらえと河畔のレストランの一つにとびこむ。さっそうおばはん（若いころのイーデスハンソン風ボーイッシュカット、ミニタイト）が注文を取りに来るので、アイン・ビーア・ビツテとビールを注文するが張り出してある定食のドイツ語が読めない。ラムステーキ…が何とか読めたので注文する。周りを見回してみるが誰もそんなのを食べてはいないので居心地が悪くなる。ビールを3杯、チェックブリーズを忘れてしまって思い出せない。

船はボンあたりまで上っており返す。アメリカ人の若いのが隣に座ってもいいかと言う。もちろんイエス。デトロイトで部品産業に勤めトヨタ関係を扱っている、友人は日本語もできないのに日本に単身赴任だと言い、コンニチハ、オハヨウゴザイマス、、、とやるのでよいしょの

平嶋としては誉めた、誉めた。完璧、君の発音は非常に良い、ほんとに完璧だ。君のほうが日本に行くべきだったのに、などとやった。いろいろしゃべっていると後ろの子連れドイツ人のおばはんが英語でチョコカイを出してきたが、途中で英語がでてこなくなってリタイア、ドイツ人は英語が下手の具体例に数えられることになる。

気のいいアメリカ青年だが、あまりものを知らない。地図を出して此処に行った、あっちに行った、ここには湖があって王様の別荘が、と言う。ああそれはルドヴィッヒだろう、彼はその湖で死んだのであるという、彼はガイド本を開いて、おおそう君はよく知っているなど感心してくれる。ルキノ・ヴィスコンティの映画があるよ、と言うがヴィスコンティを知らない。デトロイトならシカゴが近いのかと言うと、シカゴは近いたった500キロだなどとのたまうので日本じゃそれは遠いというのだが、などと会話を続けた。ウォショウスキーという女探偵の… というのももちろん知らなかった。

ケルンの大聖堂が近づいてきた。バットマンが見えてきたよ、と言うと彼は笑いもせずではバットマンを写そうと言ってカメラをかまえた。

7月8日（火）

調子に乗って食べ過ぎるとトイレの心配をしなければならなくなるので朝食は節制。昨日大聖堂の塔に登ったので足がこわっている。10時過ぎまでぐずぐずしているとベッドメイクが何回も来るのでチェックアウトする。まだ汽車の時間まではだいぶ間がある。ローマゲルマン博物館レーミッシェゲルマニッシェムゼウムに入ることにする（7マルク）。入り口のおばさんに荷物を預けさせられて、さらに1マルクとられる。ケルンはローマの遺跡だらけでこの博物館も遺跡の上に建っているのである。タイルの床にデュオニソスが描かれているのがそのままになって3階のあたりから眺められる（写真にとる）。この博物館のゲルマニッシェは看板だけでゲルマン民族の大移動などの展示などはない。巨大な高校生が二人、剣を指してこれはドイツのだろうと言っているが、これもローマ。その先のはずれのガラスケースの中に、キリスト紀元頃のゲルマンの遺物というみすぼらしいのがあってそれがゲルマンの全てである。気の毒に彼らはそそくさとそこを離れた。ナショナリズムを喚起するようなものを排除しているのではないかと勝手に推測する。君らがケルトだったころ、ローマ人がもっと多かったら君らはインデアンとおなじでイタリア語かなんかをしゃべっているんじゃないか、あ、でもそれからゲルマンがやってくるんだからやっぱりドイツ語をしゃべることになるのか。などと思う。期待してなかったがいがいと面白かった。

日経新聞を見つけたので買うが8マルクは高い。IC都市間列車でフランクフルトに帰る。

メシを喰わねばならんが王様通りは異様だから、もう一つ西側を通過して中心部へ出ることにする。だがこれも客引きの女性が立っていたり、立ち小便の匂いやらでこれでは王様通りのほうがましだった。日本語の本屋があったが閑散として客なし、船便をつかっているのか3ヶ月遅れで5月号がおいてある。市中心部にはホコ天があり、そこでイタメシにする。流しの歌手がしつこいので真ん中の方に座るのだが、何しろテーブルそのものが道路上にあるのだから、店の者も嫌味を言うくらいで止めさせるわけにはいかんらしい。カルボナーラを頼むがサラートはどうかと言う、はあ貧乏人はスープとサラダを注文するものなんだなと気がつく。インビーアビツテ、That one. と人が飲んで大きいビールのグラスを指さすが、きたのは中くらいのやつである。パンはサービス。さて、テーブルの列が3列道路の方へ伸びているとき、この一列毎に担当のボーイが固定されているということに気がついた。追加注文や、これが肝心なのだが、お勘定をするときちゃんとそのテーブル担当のボーイ氏の顔を覚えていて彼にチップを払わねばならんのだ。人の顔（それもイタリア人？の）を覚えておくという余計な手間をか

けねばならんのである。なんで客のほう而努力せねばならんのか、と日本人なら（だから）思うのである。ああややこし。

6時頃の王様通りは、会社帰りのドイツ人が大勢歩いているので、おなじ速度おなじ調子で駅HBFに飛び込んで左に抜ければよいということがわかった。駅前には終日警察ポリツァイの車が通りを見張っている。洗濯がたまっている。

7月9日（水）

洗濯物が乾いてうれしい。ホテルで本でも読んでいようと思うのだが、ゲーテ・ハオスに入っていなかったこと、スウェーデンでシティバンクが見当たらないときのために少しお金を出しておく必要があることをかんがえて外出することにする。

旧市庁舎の辺りには例のごとくローマの遺跡、メイン川に出ると向こう岸に大きな教会、ただし逆光である。二人連れの若い韓国女性に写真を撮られる。身振り逆光だというのがかわらないというのでその教会を背にとる。大ブス子ちゃんなので、ドコカラキタノはなし。眉を細くしているのと服装と英語の発音で韓国人だとわかる。日本人の男の子は一人ですたすた歩いている（リュックのポケットから地球の歩き方がのぞいている）が、韓国台湾の子らはまだグループで群れて、声高に歩いている（夏に真っ黒のシャツ）。そのうちに一人で歩きはじめるだろう。東洋人の中高年夫婦はどこも、おぼはんがリードしている。そうそう、ゲーテの家では順路がわからずうろろうろしていた韓国女性にあっちに行ってそれから…とやったらアリガトウと日本語でいわれた。向こうも僕が日本人だとわかるようだ（あたりまえか）。ところで東洋の美人（とまでは望まない、12人並みでいいのだが）はどうしてフランクフルトにいないのか、なぜだ？。

トルコ（アラブ？）女性の物もらいに＜1マルクくれ＞と寄ってこられる。3人目にはノーの調子が強すぎて、後ろからぐじゃぐじゃと何か言われる。僕のことをアラーに言い付けているのかもしれない。日本人はよっぽどカモなのか次から次へとやってくる。駅前の通りでは2ヶ所で外人が警察に捕まっていた。

7月10日（木）

10時すぎに宿をでて南下。メイン川フリーデ橋を渡り、河岸のもうひとつ向こうの通りを東北東に進む。ここはザクセンハオゼンの住宅街である。ザクセン人の居住地であったようだが、では北岸にいたのは誰か。途中で老人に怒鳴りつけられてびっくりするが、彼は私を見ていない。鬱のひとであろう。前日逆光で写真にとった教会の前を通り（日陰が心地好い）、旧橋を渡りメイン北岸に至る。ショーペンハオアの像がこの辺にあるはずだが、もうひとつ向こうの橋だったか。地図とカメラを忘れてきたので定かではない。日陰を求めて川沿いの道をさけて東へ進む。ハングルの免税店なんぞがある。この辺と見当をつけて小さな公園に入るとそこにレッシングの胸像があった。ふたり子供をつれた婦人に、コレハれっしんくノ像ダガ、ショーペンはおあーハイズコヤと英語で聞く。が逃げられた。ドイツ人の英語を解さぬこと日本人の如し。この公園でしばらく休憩。大型犬（シェパード、ボクサー）を散歩させているが、どの犬もきわめてしつけが良いので感心する。歩きかけて奇妙なじいさんを発見、10メートル進んでは右回り1回転、左回り1回転、さらに10メートル、これを延々と繰返している、気の毒である。するとそこにあった。やっぱり大きなゲーテの全身像にはかなわないか、若いショーペンハオアの胸像である。

中心街に戻ってくるがレーマーのあたりで＜1マルクくれ＞のトルコのおぼはんを追っか

けられる。次のようなことをかんがえる。(1、失業保険や生活保護の制度が、ドイツにないわけがないから食べられるはずだ。従ってこれは、割りのいい商売であるのだろう。商売なら付き合い義理はないはず。2、このおぼはん達が不法滞在者であれば、社会保障を受けられないということは大いにありうる。国民国家の枠組みは当然、とは思わないが、ないことにするわけにもいかん。＜1マルクくれ＞もしようがないかもしれない。)

ブロッケンハイマー通りのホコ天のドメシ屋に入る。ビールの注文は簡単だが、メニューのドイツ語がわからない。ちょうど横のお嬢が、大量のキャベツの酢ゆでのうえにソーセージをのせたのを食べていたのを見て、ヴェルスト!、アレとボーイ氏にいうと彼は沈着にメニューを示してこれだという(12マルク安い)。相手を貧乏人と見て、ちゃんと値段を教えてくれたらしい、ボーイの鏡である。

日記を手帳の空きを探して、小さな字でコチャコチャと書くのも何だからと文房具屋を探すなかなか見当たらない。三越を見つけたが入る気にはならない。王様通りの途中で地下商店街を見つけた。だがしょぼい。ハム・ソーセージ・パンのテイクアウトでローストビーフを300グラムくれというが英語が通じない(ブロークンだからなお)。パンをもってきたので、それもくれというつもりでOKといったのがまずかった(彼女はパンにビーフを挟むつもり)。300グラムのローストビーフとパンの不釣り合いの関係に困惑して、顔を真赤にしておぼはんは立ち往生している。OK, I bring them back. Please give me 300 totally. (「あんな一僕ホテルでビール飲むねん、アテいるやろ、アテ」はドイツ語でなんといえればいいのか、ほんとうはそういいたいのだが)。若いに一ちゃんがでてきて解決。普通の日本人に英語がいらぬのと同様ドイツ人にも英語はいらぬ、当然である。何とかなる。

駅の近くでしおたれた日本の女の子ふたりを追い越す。『岡田さん(鞆に大書)、もっと胸を張りなさい、背を丸めて歩いているとみっともないよ』と言いたくなる、お節介なおっさんである。すこし余裕がでてきたか、だがそれもまだまだ危険であるような気がする。

7月11日(金)

睡眠は十分のはずだが眠い。9時半過ぎに寝て6時半に目が醒める。日本での生活とは大違いである。テレビは30チャンネルあるがツール・ドゥ・フランスを4局もやる必要があるのか、日本のハイテク・テーマパーク(ハウステンボス、千葉のスキー場…)の紹介は先日やってたのの再放送じゃないか。いいソフトはそうないからボロのなかから面白いのを探す労働が増えただけじゃないのか。などとチャンネルを延々と押しつづけながら悪態をつく。

マネージャーのお世辞に送られてホテルをチェックアウト。

ケルン往復で汽車には自信をもっていたが、これが過信だった。フランクフルト空港から中央駅についたとき、Sバーンは一階のプラットホームに着いたのだった。逆は真ならず、当然地上のホームから乗り込むのだと思いきや、どこをさがしても空港行きがない、人に聞き”i”で聞くと地下プラットホームに行くようにとのこと。S-BAHNとU-BAHNは一体で運行されているのだ。フランクフルトは小さいので地下鉄に乗らなかったのが間違いのもとであった。もちろん歩くのが正しいのだが、地下鉄の乗り方を練習しなかったのがまずかったのである。多分Sudの方だ(これもクイズだ)と下りると学生がいたので、「ふりゅーくは一ふえん(空港)へハ、コノぷらっとほーむカラ行クコトガ可能カ」、という親切に案内板を調べてs8に乗れという。ところがs8がなかなか来ない、「コノほーむ?」と言うと、どうも自信がない。Thank you. 他の人に聞こうと上にでたが適当なのがないので、もう一方のホームに下りた、これも間違い。大荷物の男女がいるので「ツー・フリユークハーフェン?」、…??、「トゥ・エアポート?」、「イエス・s8」にだまされてしまった。言葉に釣られてやって来たs8に乗り込む。ど

うも変だ、次の駅はニーダーナントやらであったはず。次は、やや、ハオプトウ・ヴァッヒェ、町の中心じゃないか。見かねたドイツ人が我々(?) 3人に君らは逆方向に乗っておるよと注意してくれる。s 8にも上りと下りがあるんだよな。二人は決まり悪そうにしているので「我々ハ友デアル」と握手を求める。彼らはオーストラリア人だそうだ。

空港については下調べをしていたがSK (SAS、スカンジナビア航空) のデスクが見当たらない。ルフトハンザの端っこがSKを兼ねているのを発見、窓側かアイルかと聞かれたので「アイル・プリーズ」と答る。コインを使い切るためにビールを飲む。

SKのアテンダントはオババばかり。早口の英語で「飲ミモノハイカガカ、…、牛カ魚カ?」と聞いたのだが、後半については自信がなかったので「ビールを」とだけ答た。これは大間違い。何だ! <タラ>じゃないか、オー・ノー、福岡のモンががタラなど食えるか馬鹿たれ。子供のときから正月の棒ダラがいやでいやで、絶対タラなど喰わんと決めておるのに。それに中華風野菜が臭い。インディカ米は米の味がしない。昨日電話で、食事は大丈夫かと皆が心配しているよ、と聞いて、「3カ月日本食がなくても大丈夫に決つとるじゃないか、フランクフルトのハオプト・ヴァッヒェのカフェの二階にうどんバーなどというものがあつたが、せせら笑つて来たところだ」などと虚勢を張っていたのが、こんな目にあうとは。ストックホルム着。空港の見取り図を見ていたら、隣のビジネスマンが7ゲートに着くのだと教えてくれ、フランクフルトの空港に比べたらとても小さいだろう、と卑下するように言うのである、変なスエーデン人。入国審査は良さそうなおじさんで、「ミスター・ヒラシマ」「イエス」「ビジネス?」「ノー・サイトシーイング、6デイズ」「グッド・ラック」という調子。パスポートに挟んでくれたのは警察、日本大使館のパンフレットで、スリに注意。「サンキュウ」、まだまだ気を引き締めなければいけないようだ。